

平成26年10月26日(日)

老球の細道75号

地獄と極楽

会津バスケットボール協会理事長 室井 富仁

宇宙旅行はそろそろ現実味を帯びてきた。旅行値段も決まり、すでにチケットは予約満載だと聞いている。一般人の宇宙旅行が可能になったら、次なるターゲットはやはり天国や地獄など、いわゆる“あの世”と呼ばれる場所ではないだろうか。ここへのツアーが可能になり、もう一度“この世”に戻ってこれるのであれば人間の宗教観も大きく変化するであろう。なんて馬鹿なことを考えてたら、本当に地獄と極楽へ旅行した人がいたそうだとするのは冗談で、ある禅者の寓話の中に地獄と極楽に旅行に行った人の話があった。バスケットボールのチームワークにも関連する話だと思う。

「実は私が地獄を見に行ったときはちょうど昼飯時でした。食堂に入ってみると三尺幅のテーブルがずらりとならんでおり、テーブルの上には中華料理のようにどんぶりや鉢がならび、どれにも山海の珍味が山盛りしてあります。地獄の亡者にこんなに沢山のご馳走が出るのは驚きだと感心し、たくさんの亡者たちを見ると、こはいかに、みんな骨と皮ばかりにやせこけ、眼はくぼみ、真っ青な顔をしてガツガツしております。こんなにたくさんのご馳走があるのに、何でこんなにやせおとろえ、ガツガツしているのだろうと不思議に思ってよく見ると、左の手は椅子にくくりつけてある。右手は、と調べてみると、右手にはスプーンがしばってあります。このスプーン、長さが1メートル以上もあります。なるほど、どんなに遠くにあるご馳走もすくい上げる気だなと感心しました。やがて鐘の合図で食事となりました。するとどうでしょう。長いスプーンで自分の好きな物をすくい上げるまでは良かったのですが、いざそれを口に入れようとすると、スプーンが長くて口にご馳走が入りません。いやはや、見るにたえない光景ですよ。沢山ご馳走がありながら、ただスプーンが長いばかりに食品を口に入れられない。そりゃ地獄の苦しみですよ。

気分直しに今度は極楽に行ってみました。極楽だからすばらしい宮殿かと思いましたが、地獄とそんなにかわりません。食堂で食事風景を見せてもらいました。食堂は地獄と同じです。三尺幅のテーブルがあって、山海の珍味が山と盛ってあります。スプーンの長さも1メートル。ただ違うのは両側に座っている人たちが皆プクプク、ニコニコしています。どうして食べるのか不思議に思っていると食事の鐘の合図がなりました。感心しました。さすが極楽の住人ですよ。ご馳走を自分の口に入れるには長すぎるスプーンですが、向かい合った人の口に入れてやるにはちょうどいい長さです。相手を生かすことによって自分も生かされる。誠にすばらしい共生の世界でした」

・・・・・佐藤俊明著『禅の話し 二つの月』より・・・・

社会の仕組みはまったく同じでも、そこに住む人の心構えや生活態度いかんによって地獄ともなれば極楽ともなる。学校もクラスも部活動のチームもまったく同じである。「私が」「私を」「私でなくては」といった自分のこと、自分の利害のみに引きずりまわされ、取る、奪うを最高の生き方と考え、かえって自らの成長、繁栄を自らブレーキをかけてもがき苦しんでいるのが地獄。与える心、施す心、思いやる心をもってお互いが生かされることを基本にした共生社会、これが極楽。バスケットボールのチーム、そしてチームプレーもこうありたいものだとしみじみ思う今日この頃である。